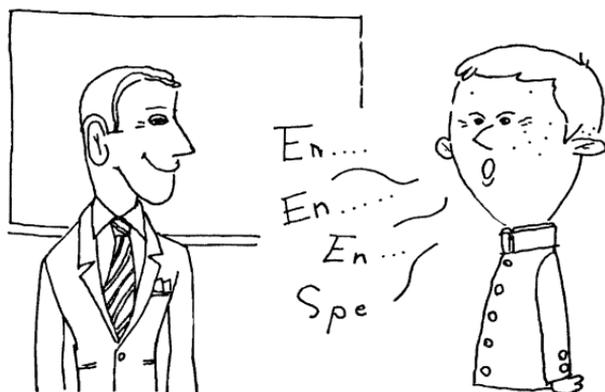


第1話

英語にはじめて

ふれること



私は飛行機が好きだった。

1943年。北区にあった柳田小学校を卒業するとき担当の市川寿郎先生に呼ばれて「きみはどこの学校を受験するのかね」と質問された。私はためらわずに、「東京都立航空工業学校航空機科」と返事をした。希望する学校からの合格通知を手にしたとき、私はもういっばしの設計士気どりで、後退翼の飛行機的设计図などを書いていた。

入学式の日午後、新入生にま新しい教科書がひと組手渡された。数学、国語、歴史、理科、機械工学、製図などの本にまじって小さな英語の教科書があった。タイトルは忘れたが、表紙に昔ふうの帆船の絵が書いてあった。私はバラバラとページを繰ってみたが、もちろん犬が星をみるようなもので何もわからないし、格別興味ももたなかつ

た。思えばこれが私と外国語の最初の接触であったのだが、当時は私の興味はまったく飛行機の設計に傾いていたのである。私だけではなく、戦時中のことであったから、英語に関心を示す生徒はほとんどいなかった。

入学式の翌日第1時間目の英語の授業があった。担当は今石益之先生。若くてハンサムで色がすき通るように白くて、ちょっと見るとアメリカ人かイギリス人と見あやまるほどであった。今石先生はまず「英語というもの」について一般的な話をはじめられた。

「英語を話す国民にはどういう国の人がいるかね」

先生はそう質問をしてからぐるりとクラスを見渡された。

「そんなことはわからない…」とみんな思った。だから先生の視線がまわってくると首をすくめた。だが私は一瞬遅れた。

「タザキ！」

「こいつはいかん。何とか返事をしなくちゃ」私はあせった。そして苦しまぎれに返事が口から出た。「英語人です」みんながワーッと笑った。そして私は、「こいつは、まちがったナ」と思った。でもいまさら引っ込みがつかない。しかたなしに、みんなといっしょに大笑いをしたあとで、すごすごと腰をおろした。

笑い声が絶えたとき、今石先生がおっしゃった。

「英語人か……でも、タザキ、これはいいぞ。『英語人』を英語で言うと English-speaking people だ。イギリス人もアメリカ人もカナダ人もオーストラリア人もない。全部

まとめて English-speaking people だからナ」

私は何だかよくわからなかったが、声の調子から判断するのに、私の答えが思わぬ結果を生んだらしいのでまずホッとした。しかし、そのあとがいけなかった。今石先生は私にその英語を言ってみろと言われるのである。

「イン……イン……イン……スピ……スピ」

クラスは湧いた。私は必死だった。何とか言わぬことには家名にキズがつく。

「イン……イン……イン……スピ……スピ……」

いくらやってもおなじ。私はあきらめて腰をおろした。

「タザキ…」と今石先生がなぐさめるように言われた。「いちどしか聞かない英語を言おうとしてよくがんばったナ。でも言えるわけではないんだよ。英語というのは日常生活で使ってないんだから、何度も聞いて音のかんじをつかんでではじめて言えるようになるんだ」

「なるほどそんなものかな」と私は思った。いま思えば、今石先生のこのことばは貴重な教訓であったが、飛行機にとりつかれている私には、さして影響を与えなかった。私はすぐ忘れてしまった。

戦時中英語は「敵性語」として無視された。だからその後の英語の授業はしだいに少なくなりやがてほとんどなくなってしまった。私はそのうち飛行機の設計とはまったく関係のない爆弾作りをすることになった。中学校2年生の生徒たちは、「動員」という名のもとにべんきょうを棄て、軍需工場に行き働くことになったのである。今石先生の貴重な教訓も実は結ばなかった。

ペラペラ英語

英語のじょうずな人について、よく「あの人は英語がペラペラだ」と言います。「ペラペラ」というのはおそらく、舌がよくまわって、つぎつぎにことばが口からとび出す、ということなのでしょうが、ほんとうに「じょうず」とは「ペラペラ」なのでしょうか。

ことばは思想伝達の道具ではありますが、ことばの中には生活そのものと何ら変わらないものもあります。たとえば「どうもありがとうございます」と言われて「いいえ、どういたしまして」と返事をする場合、「いいえ、どういたしまして」を長時間考えている人はいないでしょう。それはほとんど本能的と言える程に、口からとび出すはずです。もちろん「ある思想」を伝達してはいますが、それよりも、このことばはもはや「生活そのもの」と考えられないでしょうか。

ところが「最近の日本経済の動向は……」などという話題になったら、Thank you. に対して You're welcome. と言うように、ことばが次々とび出してくるのでしょうか。つまり、ことばには、生活的になっているものと、思考内容的なものとの2種類あるのです。そして、われわれが条件反射的にすぐ言えるように訓練をするのは、「生活的英語」です。そして思考内容的なものについては、むしろスピードよりも内容を問題にしたいのです。

英語が「ペラペラ」ということが、それ自身必ずしものぞましいことではないことがおわかりいただけたと思います。話す内容によって、日本語でもそのスピードは変わってよいのです。いたずらにスピードのみをねらうのは、軽薄さを招くものになると思います。ペラペラとそれこそ内容のない英語よりも、ゆっくりでも内容のある英語を話すようになりたいものです。